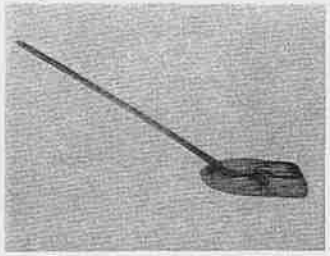
あい染に使われる道具

アイコナシ



乾燥させたアイの葉を寝床と呼ばれる室に入れ、アイの葉に水をまき、しみこませながら積み上げると５～７日で発酵が始まります。

さらに、まんべんなく発酵させるために、１週間おきに水をまきながら、このアイコナシで積み返しを行います。そうすると40度以上の温度を保ち続け、70～90日で黒々とした土状のスクモと呼ばれるあい（藍）ができあがります。

このスクモを臼でつき固めるとあい玉ができあがります。

アイガメ

あい玉の粉４斗（約72ℓ）をハンギリと呼ばれる浅いオケに入れ、熱湯やカセイソーダなどを加えて約１時間足で踏み込みを行います。これを、アイガメに移し、水や石灰などを入れ30分間かきまぜ、その後１週間毎日朝夕かきまぜます。カメの中で赤味をおびたハナ（アワ）ができると染めることが可能になります。なお、カメは温度を保つため土間に埋められていました。

農作業ごよみ

（明治・大正ごろ）

季節	月	稲作	麦作	アイ栽培	あいと関連の仕事
冬	1		麦ふみ		
	2				
春	3		中打ち		
	4	田ごしらえ もみまき 育苗		苗床へ播種	
	5		もとよせ	間びき	
夏	6	田植え 草とり 水管理	麦刈り 脱こく	麦畑のうね（本畑）へ移植 農薬散布	
	7			もとよせ・灌水 施肥 刈り取り	
	8	とめ草		追肥 二番刈り	刈り取ったアイを葉と茎に別け葉のみ乾燥させ紺屋へ出荷
秋	9			（三番刈り）	
	10	稲刈り		種取り	農村部では農閑期のみ紺屋をする者もいた。
	11	脱こく	麦まき		はた織り
冬	12		肥料やり		

人は染物で美しくなった…

日本民俗学の父と呼ばれる柳田國男は、その著書『木綿以前の事』の中で、染物について次のように書いています。

「今まで眼で見るものと思っていた紅や緑や紫が……各人の身に属するものとなった」「人は昔より一段と美しくなった」

学習の手引

第７号

あ い 染

アイの花

広島市郷土資料館

〒734 広島市南区宇品御幸二丁目６番20号

☎（082）２５３－６７７１

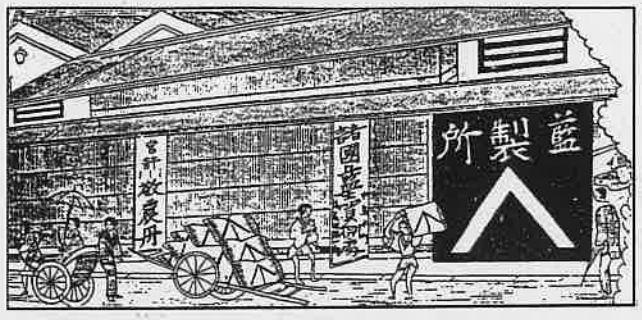
染物の歴史

先人が、草木の実や葉・根のアクをつかって布を染めるようになるのは、およそ3,000年くらい前の縄文時代の終わりころからと思われます。

そして、今から1,400年くらい前の飛鳥時代になると、盛んに大陸から文化・技術を取り入れ、国の発展をはかりました。この時、染物の技術も取り入れられ、古くからあったやり方とあわせて、より美しく染められるようになりました。

アサの繊維を織ったものを布といい、多くこれを衣服としてきましたが、今から400年くらい前、ワタが伝えられ各地で栽培されるようになりました。ワタを紡いで織った木綿は、アサよりも簡単に染めることができ、その染料となるアイが多く作られるようになり、あい染めが盛んに行われるようになりました。

カメにつけて布を染めている様子



『広島商店買物仕入案内』（明治16年刊、小谷 進氏蔵）より
店の前であい玉の入ったカマスを荷車に積んでいる

広島市域での あい染

広島では、浅野長晟が元和５年（1619）に藩主として入国してまもなく、太田川下流減一帯でのアイづくりを奨励したことから、アイの栽培が普及していきます。江戸後期の文化文政期（1804～30）には沼田郡域から高宮・高田郡や山県郡へと栽培地域が広がっています。

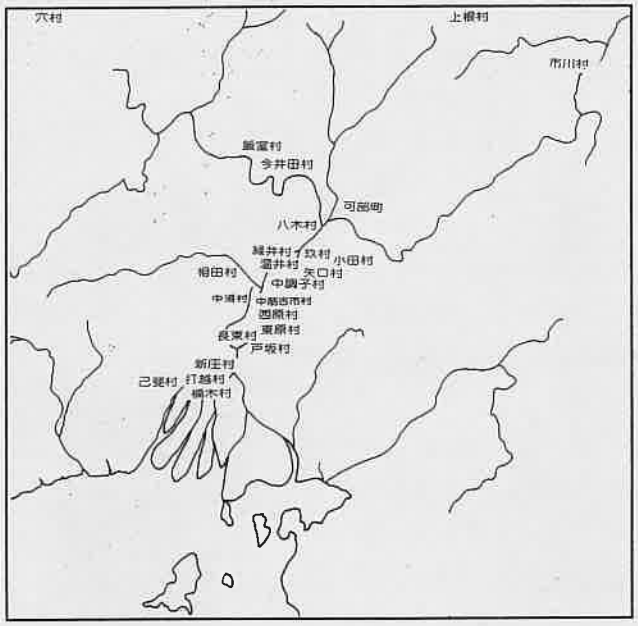
また、ワタづくりも盛んになり、ワタを紡いだ糸や織物を染める紺屋と呼ばれる染物屋がどんどん増えています。

『知新集』（文政５年完成）によると、広島城下に、染物師、藍絞染師、染物模様色染師や紺屋などの名が数多く見られ、あい染が城下の主要な産業であったことがうかがえます。

このあい染は、明治時代にも受け継がれ生産高も増大しましたが、外国からアイや化学染料が輸入されるようになって生産量は急速に減少し、昭和初期には、広島市域でのアイの栽培やあい玉づくりはほとんど見られなくなりました。

アイは虫よけ

アイはマムシや毒虫がきらい、アイで染めたものを着ると蚊や虫が近寄らないと言われています。野良着や山仕事の服が、あい染された布でつくられたのもこのような理由からでしょう。



明治ころのアイ栽培地帯
『新修廣島市史』第３巻により作成